

少しく大義名分を知れ：論説

著者	柳井，秀岳
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 7
ページ	1 4 - 2 0
発行年	1900-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/5483

すに非ずや。見よ、子所言者、其人與骨、皆已朽矣の一言は、孔子が先王を稱述するを喝破せるものなるを。是れ以て彼が如何に好古者流を罵倒せるかを知るべく。又以て彼が當時已に千古を蔑如するの氣概ありしを知るに足る。故に當時孔子は彼を評して龍の如しと曰へり、復た安んを祖述的人物と謂はんや。且大戴禮に仲傀と並稱えて、大夫、士、庶人を教ふるの方法を説けるが如きは老聃の性分とて最も短所なる所に非ずや。故に予は論語及大戴禮に稱する老彭を以て殷の賢大夫と爲すなり。決して老聃なりと爲さざるなり。

又老子の姓氏名字に就て古來說あり。史記に據るに姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡して聃と曰ふと云へり。然れども諡法に聃の字なま。且老子は一匹夫たれば、固より諡あるべき筈なま。若し其弟子輩が諡を以て師を尊ばんとしたるものならば、必ず其令徳を擧げて、其令名を撰むべし。安んぞ耳漫の義を取りて先師の諡と爲さんや。許慎曰はく、聃は耳漫なり、故に耳と名つけ、聃と字すと。蓋ま聃の字義は耳平漫にして輪廓なきの謂なり。故に耳と名つけ、聃と稱するは皆彼自ら名字したるものにきて。他人より稱號したるものに非ざるや必せり。姚姬傳曰はく、老は其氏、聃は其字なり。陸德明の老子音義中史記を引きて字聃と云へる所凡そ兩處あり。又後漢書桓帝紀章懷注に史記を引きて老子、名耳、字聃と云へり。然らば史記の眞本元と此の如くなりしを、元宗以後に改竄せしものなりと。其説取るべきに庶幾からんか。

少く大義名分を知れ

早識あるの士よ、自信あるの士よ、願くは滿腔の熱情を以て、吾人が呶々する所以のものを見よ。
 漢學は、徳川氏に至りて、旺盛を極めたり。經學に、文章に、吟哦に、燦然とて光を發てり。而
 かも名分の紊亂せまこと、此時より甚まきはなかるべし。彼れ漢學者の多くは、心酔之餘、彼我の
 別さへ辨するを得ざりしなり。沈溺の結果、全身支那化まで、既に神州臣民たるの價値を失ひまを
 知らざりまなり。見よやかの宏覽博識天下に匹なく、豆を嚙で、古今の學者を罵倒せし物徂徠其人
 にまで、尙東夷と自稱まで、恬然耻ぢざりしにあらすや。彼等は、神州が萬世一系の天子を戴く國
 體たるを知らざるなり。彼等は、目あるも仰で富岳千秋の雪を視ざるなり。俯して琵琶瀨の波を
 瞰ざるなり。而して彼等は偶像的に義舜を尊ぶを知るのみ。泰山の雪、峨眉の山月を慕ふを知るの
 み。洞庭の遠波、蜀江の清流に想を馳するを知るのみ。あゝ、彼等が日本人としての生存は、誠に
 憐む可きに非ずや。山崎闇齋嘗て其門弟子に問うて曰く、當今若し彼の邦孔子を以て將となさ、孟
 子を以て副となし、大兵を率ゐて、來襲することあらば、吾輩孔孟の道を學ぶものは、將に之を奈
 何せんとするか。と門弟子答ふる能はず。曰く教を請はん。と闇齋曰く、若し不幸にまで、國家此
 の事あらば、吾輩神州臣民たるものは、宜しく甲を撰し、劔を取り、之と一戦まで孔孟の首を致す
 可きのみ。これやかて孔孟の道なり。と嗚呼、何事ぞ、彼等は猷身的に孔孟の道を學ぶものなり。
 支那化せんが爲めに漢學を修むるものなり。彼等は、自重なく、自尊なく、自信なく、自我なく、
 主義なく、定見なく、觸るれば動き、吹けば儼るゝ無骨漢なり。何を彼等の淺々然たる。汎々然た
 る。宜なり彼等が心酔沈溺闇齋の間に答ふる能はざることをや。悲夫、彼等は（最も殘酷に評すれば）

既に日本人に非ざるなり。然り、日本服を着、日本語を話し、日本の五穀を喫する外は、殆ど日本人たる所以のものを存せざるなり。其意、感情に至りては、是れ恰乎たる支那人。彼等の目には、皇室もなく、神州もなきなり。何ぞ況んや大義名分をや。否、支那流の大義名分は一桀紂を一匹夫となす流の十二分に知覺し居るも、日本に於ては何如に折衷せざる可らざるかの點に至りては、毫も知る所なきなり。即ち彼等は文學を讀むを知るのみ。死句を誦するを知るのみ。換言すれば、彼等は書物の奴隸、文句の役夫たるに過ぎざるなり。嗚呼、國若しかゝる大義名分の何たるを知らざる痴漢のみならまめむか、亂亡すること立つて待つ可きなり。夫れ足利義滿の覇圖は、多とすべきものあり。而も彼れが名分を誤まりし罪は、泯滅すべからざるにあらずや。徂徠の才學は、古今に絶す。而も東夷の語は遂に消滅すべからざるにあらずや。大義名分大に神州臣民の知らざる可らざる所なり。

翻て之を今に觀よ。漢學は頗る衰へ、經史は高閣に束ねられたり。故に支那心醉の結果、名分を誤るゝが如き愚物は幸に無きが如き。然らば、現今の世、名分を誤るもの、果て一人も無き乎。吾人は無き事を望む。而も有るを悲ますんば非ず。其大に有るを長大息せずんば非ず。

浦賀の砲聲は、國民三百年の夢を破れり。文明の潮流は滔々として神州に及べり。漢學は廢せられ、經史百家の書は反古紙として賣られたり。洋書大々的勢力を得て、充分に輸入せられたり。爾來洋學は日を追うて旺盛に赴き、恰も燎火の枯野を焼くが如く、忽にして天下に彌漫せり。苟も學を修むる少年、蟹字の冊を手にはせざるなく、官私兩學校の生徒は、日夜英獨の字彙と首引をなすの有様を呈し、其盛なること、遙に漢學の盛時に過ぐ。物盛なれば弊害を生ず。茲に西洋崇拜、洋學心醉

の奴輩を出すに至れり。彼等の尤物は爲以らく、神州國民は當に歐化せざる可らず。汲々として彼れの文物を模倣するに努めざる可らず。耶蘇教にあらずんば、信奉するに足らず。偶像を拜するは陋なり。御眞影と雖も、固より拜す可らず。洋書以外には讀むに足るものなし。東洋陳腐の文字、豈に目を煩はすに足らんや。と一も西歐、二も西歐、西歐の爲には、全身を寄附して客まざるなり。嗚呼、是は之れ國民十餘年以前の夢、或は今猶ほ其殘夢覺めざるものありと雖も、最も少數の愚人、自覺する能はざるに過ぎざれば、吾人今更かゝるものに向て喋々する事をせざるなり。縦に喋々するも、かゝる國家的觀念なき外國崇拜奴の頭腦は、到底改む可らざるを知ればなり。故に吾人は、進で現今多くの人士が、大に名分を誤まり居る一事に就て、少く辨ずる所あらんとす。

願くば吾人をして畏憚する所なからせめよ。

何故に現今の我が國民は十九世紀と謂ふ歟。何故に千九百年と大書する歟。換言すれば、何故に彼れの正朔を奉ずるまでに名分を誤まらざる可らざる歟。

本邦に於ける神武紀元は、政治的紀元なり。歐米諸國に於ける耶蘇紀元は宗教的紀元なり。故に紀元たることは一なりと雖も、神武紀元と耶蘇紀元とは、根本的に其方面を異にす。既に方面を異にす。従て吾人は深く其所以を知らざる可らず。何故に神州獨り政治的紀元ある乎。何故に歐米諸國政治的紀元なくして、宗教的紀元ある乎。吾人深く其所以を知らず。然れども、吾人が淺慮なる考を以てするに、彼れの政治的紀元なき所以のものは、是れ變世不變の政治的統一なく、革命相踵ぐが爲めにあらざる無きを得んや。然り、吾人は必ずしも、是のみによりて然りと謂はず。固より他に其原因ある可也。而も是れ其の最大因たるは、吾人の斷言して憚からざる所なり。其れ既に彼

等は政治的紀元を求むるも得べからず。故に社會の精神界に大勢力を有する宗教によりて紀元を立てしにあらざるか。彼等が世界唯一と迷信せるバイブルの主人公たる耶穌の生誕を以て、殆ど已を得ず。紀元となせしにあらざるか。若し然らずんば、西歐諸國、縱令其國語に於て、風俗習慣に於て、兄弟の關係あるも、豈好で其紀元を一にせんや。其紀元を一にするは、已を得ざりしなるべし。若し已を得んか、彼等は各々其國の政治的紀元を設けよや疑なきのみ。嗚呼、彼等の宗教的紀元あるものは、かゝる理由あるに非ざる歟。神州の政治的紀元ある所以に至りては、其事明々白々たるもの。皇統綿々、國未だ嘗て革命なきに由るは、殆ど吾人の贅言を要せざるなり。咄、彼れの正朔を奉えて得々たるものは、獨り神州に於て、政治的紀元あるは、神州が宇内に冠絶する國體たるを示す所以なるを知らずや。何ぞ少しく富岳千秋の雪を見ざる。琵琶瀲灩の波を見ざる。而て汝が自重、自尊の精神を養はざる。

於戲、神州既に宇内無比の政治的紀元を有す。國民たるもの、當に奉ず可く、守る可し。然るに何を苦んで十九世紀と謂ふ歟。千九百年と大書する歟。日本は既に二千五百六十年なることを知らずや。何なれば爾く彼れの正朔を奉するまで名分を誤まらざる可らざる歟。是れ世界一般に用ふる紀元なれば、奉するも差支なしといふか。東夷の自稱と撰ぶなきを如何にせん。日本の正朔を奉することを主張するものは、狹量なるものといふか。西洋人たるを如何にせん。洋書を讀み、洋人に就くが爲めに奉せざる可らずといふか。氣慨なき愚物たるを如何にせん。且つ思へ、洋書を讀み、洋人に就くが爲めに、彼れの正朔を奉せざる可らざるの理由、安にかある。日本の正朔を奉すること、を主張するものは、狹量なるの理由、安にかある。彼等は、自ら大を氣取りて、而も大義名分の觀

念なきを自白しつゝあるを知らざるなり。吾人は斷言す、彼等は決て確固たる理由の下に、彼れの正朔を奉ずるにあらずまて、唯、泛々然とて外に之れ徇ふものたることを。即ち彼等は毫も名分何如を見るの識力なく、無意識的に彼れの正朔を奉じつゝあるものなり。知らずして奉ずるは恕す可し。其の見識なく、生地なきを表明するを如何にせん。人若し彼等に向て、徂徠が東夷の語を告げんか。彼等は眉を昂げ、目を瞋らえ、其名分を誤まれることを軋排して、數千言を吐くは容易なる可し。而も自ら不知不識の間に、名分を誤りつゝあることは、些も顧みざるなり。何ぞ彼等の歴史を活用せざるの甚えき。彼等は歴史を以て、單に過去の記録としてのみ暗記すべきものとする歟。歴史は過去の出來事によりて、現在を知らえめ、未來を豫想せしむるものなることを知らずや。然り、彼等は慥に其然る可きを知る。而も其能く然るもの少なきは、於乎、亦、慨きて歎せざる可ん乎。

吾人は既に多くを云へり。然れども、歸する所は、大義名分を誤まる勿れといふに過ぎざるなり。彼れの紀元を呼唱するの理なきをいふに過ぎざるなり。而て我が紀元は必ず呼唱せざる可らざるをいふなり。今や我が國民の多くは、餘す所僅かに一年、二十世紀は將に至らんとす。一大刷新の期は來れり。などの痴言を漏らえて、欣々乎たるは何ぞ。爾く他國の年頭を賀せんことを望まんよりは、退て我が國史を讀め、我が紀元を思へ。徒らに他國の爲めに祝盃を擧ぐるは、酒を費やして、後世の笑を買ふに過ぎざるのみ。愚焉より大なるは莫し。嗚乎、芙蓉の峯高くして萃乎たり。是ぞ御國の神靈なれや。琵琶の水深くして淼乎たり。是ぞ御國の明鏡なれや。此の山、此の水是ぞ吾人が靈感なるかな。

何故に外國心酔の奴輩を生ずるかの點に就ては、吾人また身見なきに非ず。然れども長きに失するを恐れて、已を得ず茲に擱筆せり。他日機會あらば、題を改めて、吾人が言ふ可き限をいはん。又我が校内に於て、吾人が嫌焉たらざるものあれども、とは別に風雲錄に載すべければ、此の文と共に御一覽あれ。

紀元二千五百六十年一月下旬龍田山麓一草舎に於て秀岳識す、

雜錄

琉球 (承前)

教授 武藤 虎太

《八》工藝 絹布の織物は沖繩の名産なり。但し絹は割合に少し。尤も久米嶋は養蠶盛なり。然れども、糸は粗にして黒く、紬を織出す。織機は從來内地に使用せし「シモ機」にして、之を織るには、先づ杼を通して、縞、飛白の能く揃へるや否を見、整はざれば之を伸縮し、然る後、梭にて打つなり。然る故に、縞、飛白能く整ふ。されば、精巧の品は一日の功程六寸にも過ぎず。其高價なる所以蓋茲に在るべき。綿布は世に薩摩飛白と稱す。薩人は琉球縞と稱す。其糸を染むるや、屢浸し、屢乾燥して槌打す。故に、水に澀濯するも色變する少し。木綿は沖繩本嶋、久米、惠平屋、南部諸嶋の産出あれども、極めて少く、大抵内地より輸入す。

麻布は、細上布と稱え、薩摩上布と云ふ。布を以て之を織る。中にも、南方諸嶋の産は、先嶋織と